
正気と狂気の狭間

凧屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正気と狂気の狭間

【Nコード】

N4386M

【作者名】

風屋

【あらすじ】

事故で五十二日間昏睡し、夢を見ていました。

その夢の内容を可能な限り文章に起こしたものです。

当然ながら、ストーリー性などは皆無でドロドロとした狂気の世界を彷徨うだけの散文です。

不快な気分になるかもしれないのでご注意ください。

最後の記憶

時速60km程度で右斜線を走行中、渋滞していた左斜線からステップワゴンが私の目の前に車線変更してきました。

目の前でドアを閉じられたようなもので、ひとたまりも無く斜めに衝突。

強制的に曲げられたハンドルが腹部にどすんとぶつかり、直後にガコンとプラスチックが跳ねる音が聞こえました。妙に軽い音に感じられました。

再度の衝撃で意識が戻ります。

地面に倒れていました。後から聞いた話によれば、衝撃でバイクごと弾き飛ばされ、ステップワゴンを飛び越えたようです。

立ち上がろうとするものの、右手に全く感覚がありません。まるで重たい棒切れをぶら下げたような感覚です。

左手は動いたので、なんとか身体を起こそうとしましたが、強烈な脱力感に襲われ、力が全く入りませんでした。

いつの間にか加害者の母親が膝枕をして「どうか死なないで」と叫んでいました。

加害者の妹さんが携帯で救急車を呼んでいるのが見えます。

加害者本人の姿が記憶にないので、恐らくは運転席で呆然としていたのでしょう。

呼吸が難しく、ベルトを緩めサングラスも外して貰い、救急車が来るのを待ちます。

「早く来て」「死なないで」と繰り返す（加害者の）母親ですが、私は「これくらいなら死にやしねえさ」などと軽く考えながら、とにかく呼吸を確実に行おうと、一生懸命に深呼吸をしていました。途中、バイク便の同僚が通りかかり、本社へ連絡をしていました。私の輸送していた荷物を運んでくれるよう頼みましたが、考えてみれば目的地が別で届けられるはずがありません。

どのくらい時間が経ったのか、ようやく救急車が到着、私をストレッチャーに乗せます。

安心した事が何かしらの作用をしたのか、この辺りから急激に呼吸が出来なくなり、視界が真っ赤に染まりました。

口の奥に、レバーの味が広がってるような気がしました。

いつの間にか「くるしい、くるしい」と呻いて居たように思います。そのまま視界がぐるぐると回り始め、意識が断片的に戻ったり切れたりを繰り返しました。

意識の断片の中で、「A B型が足りない！」と言う緊迫した声を聞き、「ああ、これは死ぬかもな」と初めて思いました。

そのまま意識が途切れました。思い残す事とか、遣り残した事とか、そんな事を考える余裕は全くなく、暗闇は圧倒的な勢いで襲いかかってきました。

最初の記憶

私の記憶は、バイクに乗っているところから始まります。

私のバイクはオンロード車なのですが、何故か乗っているバイクはアメリカンでした。が、全く気にはなりません。

とにかく、暗い道をひたすらに走っていました。

自分が死ぬのだと言うことを強く感じ取っていて、両親に、特に母親に謝らなくちゃいけないと言う思いで、必死に走っていました。

北海道の港町の印象。古びた街頭に照らされて茶色とセピア色で埋め尽くされた町並みをひたすら走り、運河を超える橋をいくつも渡ったような気がします。

とても綺麗とは言えないアパートのような場所に着き、何となくここが目的地だと判りました。

アパートの中は半地下になっており、数段の階段を下りると雑多とした店になっています。

どうやら、いかがわしいグッズの販売店のようです。アダルトビデオやらダッチワイフやら、ひと目でそれと判るものが並んでいます。私がいかがわしい人間だから相應しい場所に入り込んでしまったのだと、つまりこれは地獄なのだと、何となく悟りました。

いつの間にか、私はベッドの上に寝ています。動こうとするも、ダッチワイフに手足が括り付けられており動きが取れません。

周囲を数人に取り囲まれて、うちのサングラスをかけた一人が注射器を手にかけていたことから、何かしらの犯罪に巻き込まれたのだと悟りました。

何とか逃げようと必死の抵抗を試みますが、身体は動きません。右手が折れている事を何となく思い出しました。

注射器を討たれたら死ぬ。出来る全ての抵抗をしようと、左手を伸ばしてサングラスの男を突き飛ばしますが、男は「お、何だ何だ」と言っただけで、全く効いていません。

そのうちに左手も動かなくなり、注射器を打たれます。

いつの間にか口に取り付けられた酸素マスクのようなものからシューツと音がして、たちまち意識が遠のきました。

「はい、終了」

男の声が聞こえ、ああ、これで死ぬんだなと思いました。

死んだ私は運河に放り込まれ、やたらに生暖かい水に沈んでいきました。

気が付いたら、私はベッドの上に寝ていました。動こうとするも、ダッチワイフに手足が縛られて動きが取れません。

何故か、さっきと同じ場面になっています。

理由は判らないが、きつともう一度だけチャンスを与えられたのだと思い、今度こそ逃げ出そうとするも、全て同じ結果に終わり、再び生暖かい運河に沈められました。

最初の記憶（後書き）

注釈：

サングラスの男はどうやら私の命を救ってくれた主治医の先生だったようです。（もちろん本物はサングラスなど着けていませんが）後で聞いたところによると、私は治療中に大暴れしたため、がんじがらめにベッドに縛り付けて治療を続行していたそうです。

「はい、終了」は、この先生の口癖と言うか、処置が終わった時の決まり文句でした。

病院

目を覚ましたところは、小さな会議室のような狭い部屋でした。

私はふかふかのベッドに寝ており、身体は全く動きません。

前回の運河の町とのつながりは判りませんが、とにかく病院に辿りつけたようです。

周囲には私の両親と医者があり（その人間が医者だということは理解できていました）、医者は何枚かのレントゲンらしき写真を見せながら、両親に何かを説明していました。

音は全く聞こえず完全な静寂でしたが、医者と両親の会話は理解できました。私が死ぬかもしれない、最善を尽くすと言っているようです。

助けてもらえるのだと言う実感があり、安堵とともに意識を失いました。

病院（後書き）

注釈：

両親が呼ばれ、説明を受けている最中に意識が僅かながら戻っていたようです。

実際には集中治療室の一角のカーテンに仕切られたスペースだったそうです。

ホスピス

次に目を覚ましたのは奇妙な部屋でした。

まるで幼児預かり所のように壁や天井に動物や空などの稚拙な絵が描かれている原色で埋め尽くされた空間で、周囲にはぬいぐるみや布で出来たサイコロのようなもので溢れかえっています。

その心安らぐように配慮された装飾が、私の不安を強烈に掻き立てます。

ここは、もはや助からない人間が死ぬまでの時間を過ごすための部屋、つまりホスピスなのだとは何となく察しました。

自分はもう助からない。もう医者は諦めたのだと。

突然、そこが元居た病院とは異なる、別の国の病院であると理解しました。

元の病院に戻らなければ。さっき(?)まで居た自分を助けてくれる病院に戻らなければ。

立ち上がりますが、身体が全く言うことを聞かず、自分が歩いているかどうかも定かではありません。

部屋には受付窓があり、そこに紙が置いてあります。

元の病院に戻して欲しいとペンで書きますが、指も全く言うことを聞かず、文字になりません。そもそも元の病院が何ていう名前の病院だかも判りません。

とにかく、「東京、病院」とだけ辛うじて書きますが、それを誰に見せればよいかも判りません。

ふらふらと部屋を出ると、やたらに近代的なビルの中の病院でした。何の根拠もないのですが、ここが香港の超高層ビルの最上階だと判ります。

普通に歩いて帰ることは出来ないのだと、絶望的な気分で理解し、このビルの記憶はここで途切れます。

ホスピス（後書き）

注釈：

後から聞いた話に寄れば、私はベッドの上でも転げ回っていたそうです。

このため、治療中でないときも大半の時間はベルトでベッドに拘束されていたとのこと。

リベッティングマニア

周囲に人の気配を感じ、意識が戻り（？）ます。
複数の医者に治療されている最中でした。何とかまだ生きているようです。

身を任せる他ないのですが、最後に突然バチン、バチン、と鋭い痛みと衝撃を受け、何かの金属を身体に打ち込まれているのを感じました。

見ると、私の胸一面にパンクファッションのように鉋が打ち込まれています。血が出ている様子はありません。

無数の鉋が南米の民族装飾である事から（根拠無し）、この病院は南米の病院で、この病院で治療を受けると鉋で装飾を施されてしまうのだと理解します。

女性の看護師さんが横で「あー、リベッティングマニアじゃありませんって言うの忘れちゃったねー」などと喋っているのが聞こえました。

次からはそう言おうなどと思いながら、この記憶も途切れます。

リベッティングマニア（後書き）

注釈：

最近の縫合は医療用ホチキスで行うのですね。ステープルと呼んできました。

バチン、バチン、と言う金属を打ち込まれる感触は、恐らくこれでしょう。

一体何処から「リベッティングマニア」なる単語が沸いてきたのか、我が脳髓ながら全く理解できません。

砂漠

そこは南米の砂漠の真ん中の病院でした。

病院の周辺だけは近代的ですが、敷地から外は砂漠と石造りの廃墟のみ。

喉がカラカラに乾きますが、これを潤す手段はありません。

家に帰る為には、砂漠を越えなければならないようです。

しかし、砂漠には蛇やサソリが大量におり、これらに襲われて命を落とした人の死骸がそこかしこに転がっています。

ですが、恐怖はそれほどありませんでした。

何故なら、ここでは蛇やサソリによって命を落とすことは最高の幸福だと知っていたからです。（根拠無し）

ここでは、神様に運命をゆだねて毎日を楽しく砂漠の中で過ごす人達がいいます。その人たちが周囲で蛇にかまれ、サソリに刺され、次々に死んでいきます。その笑顔は幸福そのものです。

それだけ幸福ならば、ここで死ぬことも怖くはないと感じ、私は裸足で砂漠を歩きました。

あちこちで死んだ者の葬儀をしているのを目にしました。

皆、砂漠の民のようで、このしきたりに従って埋葬しています。

その方法は、砂漠の中で腐乱状態になった頭蓋骨を開き、中に砂を突っ込んで混ぜて、その混合物を砂漠にばら撒くというものです。

いつだったかテレビでそんな民族があると聞いた様な気がして、この人達がそうなんだと、そして自分が死んだら同じ方法できちんと埋葬してもらえると奇妙な安心感を覚え、蛇もサソリも恐れずに砂漠を歩きました。

強烈に喉が渴きます。家に帰ったら、コーラを浴びるほど飲んでやると、心に誓いました。

いつの間にか、空は紺色の夜空になっていて、絵本のような星空が映っています。

いわゆる 印で表現された星と極端にディフォルメされた三日月が空に貼り付いているようでした。

どのくらい歩いたか判りませんが、どうやら道に迷ったらしいです。少なくとも、このまま歩いていても家にはたどり着けないと言うことははっきりと判っていました。

いつの間にか、飛行機に乗っていました。複座のプロペラ機で、無精ひげを生やしたアル中の老人が操縦していました。

皮張りのヘルメットとゴーグルの中で陽気な笑顔を振りまきながら、老人は何かを喋っていました。聞こえませんでした。「心配するな」とかそんな事を言っていたように思います。

絵本の星空を間近に見つつ、プロペラ機は山を二つ越えました。気が付いたのはやはり砂漠の病院でした。

砂漠（後書き）

注釈：

この頃から、南米と言うイメージが強力に焼きつきます。

体験

その日は何か特別な施設へ連れて行ってもらえると言うことで、訳もわからないまま大人しく着いていくと、バーのような部屋へ通されました。

病院の外れのその施設は麻薬バーだそうで、そこで一回4000円でガンジャ（マリファナ）を吸わせてもらえるとの事です。

ガンジャを吸うことに抵抗は感じず、促されるままに酸素マスクをつけて深く吸い込むと、突然身体が溶解しました。

私の身体がどろどろに解けて液体となって酸素マスクに吸い込まれて行きます。

耳の奥で液体が細い管を流れるような音が、チュルチュルチュルチュルとひっきりなしに続いていました。

細い管は何かの工場のパイプラインのように、時に直線に滑り、時に直角に曲がり、私は目がぐるぐると回りながらもパイプの中を流れていきます。

突然、ゴオオオオオオオツと言う不思議な音の中に放り出されました。

静寂に満たされた巨大な空間です。多分、宇宙だと思います。あまりにも広く、あまりに静寂が徹底していたために、轟音が響いているような気がしているのだと思います。

私の身体はいつの間にか液体ではなくなり気体のように漂い、しかしここまでと同じ確たるベクトルを持って導かれ、周囲には同じような誰かが大勢いるのが判りました。

視覚は既に無く、しかし、ただそこにそう言うものが存在することだけを「何となく（としか言いようがありません）」理解できるのです。

そして、宇宙をどこかに向かって引つ張られ、いつしか自分が何かの周囲を回っていることに気付きました。

自分や周囲の人達とは根本的に異なる、巨大な存在が居ました。不思議な轟音もそこから響いているようです。

しかし、この辺りで自我が薄くなっていきました。

他の人達の粒子（？）と自分が混ざり合い、渾然一体となっていきました。

渾然一体となればなるほど、自我が消えれば消えるほど、私はその巨大な存在と同一になれる事が判ります。

最後に感じていた感覚は、最高の幸福感。人生全ての幸福をまとめてもその100分の1にも及ばない、津波のような幸福感。

そこでは何もかもが認められ、赦されました。そこには全てがあります。過去に死に別れた人も、まだ生きている両親も、過去も未来も関係なく、そこには全てが存在しています。

文字で表すのであれば、「完璧な満足」このくらいでしょうか。

私はここで、後にも先にも感じることはない「完璧に満ち足りた状態」を体感しました。

善も悪も美も醜も存在せず、ただただ幸福のみで満たされています。全ての人がそこに居ました。そこに私が加われる事がひたすら嬉しくて嬉しくて、その喜び以外の感覚がなくなりました。

再び自分がチュルチュルと管を通ってこの世に叩き戻されたとき、私はどうしようもないほどの苦しさを覚えました。

何で戻されてしまったのか、またこの世を苦しまなければならないのか。

その思いでいっぱいでした。

体験（後書き）

注釈：

多分、話に聞く「あれ」だと思いますが、書けば書くほどアブナイ人になってしまうので、この夢の解釈は各人にお任せします。

チュルチュルの神様

いつの間にか、身体中に打ち込まれた鉋は見えなくなっていました。どうやら、皮膚に吸収されたようです。そのうち排泄物と一緒に出て行くようです。（根拠無し）

再び麻薬バーへと連れて来られました。

以前はあれほど渴望していた「あの場所」への入口ですが、どう言う訳か、そこへ行くことに強烈な抵抗を感じています。

何となくですが、判っていました。「もう一度あそこに行ったら、絶対に帰ってこれない」

同じように酸素マスクを付けられ、シューと何かの気体が入り込んできますが、必死に息を止めて吸い込まないように抵抗します。

誰かが「さあ、チュルチュルの神様に会いなさい」とか言ってるのが聞こえました。

あの場所にいける。物凄い誘惑を感じましたが、しかし、行ったら最後。

自分はそれを望んでいたはずでは？もちろん、今も望んでいます。しかし、何か理由は全く判らないが、絶対にそこに行つてはいけないと言う強い気持ちがありました。

僅かに吸い込んでしまい、身体が溶けそうになりますが、一生懸命に耐え（どうやって耐えたのか判りませんが）、何とかやり過ごしました。

誰かは困り果て、「困ったわねえ、これじゃありベツトを出せないわ」とか言ってます。

どうやら、身体に吸収された鉋を身体の外に出すためには、あの場所に行かないといけないようです。

それでも拒絶を続けていると、いつの間にか体操で使う平均台のよなものにうつ伏せに寝ていました。隣には同じ姿勢の全身真っ黒な人間が1人。

それが、私のバックアップである事がわかります。私の身体は男なので、バックアップは女だったようです。（意味不明だが、それで納得していた）

それでも何度かトリップするようにガンジャを吸わされますが、変わらずに抵抗を続け、結局鍼を体に残したまま、便秘のような気分で返されました。

チュルチュルの神様（後書き）

注釈：

これも、多分「あれ」でしょう。

大人しくあの場所へ言っていたらと思うと、正直怖いです。

飛行機

そこはジャンボジェットの中の病院でした。

喉が乾いたのを見かねて、看護師さんがジュースをくれると言いました。

しかし出されたジュースは飴玉のような形で、口に入れても何の感触もありません。一瞬にして蒸発してしまったかのように手ごたえがありませんでした。

もう一つくれと頼みますが、その前に今のジュースの感想を書けといわれます。

感想はチェックシートのようになっており、該当するところをで囲むようになっています。チェックシートの選択肢には「美味しい」「冷たい」などの他に「可愛い」とか「かつこいい」とかがありました。

いつしか、バイクスタントをして回る曲芸団と知り合って話しています。

曲芸団と一緒に移動し、砂漠の丘の一つでバイクスタントを始めます。

どうやら仮面ライダーが何かのスタントシーンを再現しているようです。丘をジャンプ台に高く飛んだバイクが2台、空中ですれ違います。

戦闘シーンのようで、すれ違いざまにバイクを激しく接触させていました。当然ながらバイクは地面に落下し、大事故になります。

膝が反対方向に曲がり、骨が見えるほどの大惨事です。しかしそのライダーは笑顔でインタビューに答え「またやろうと思うよ」などと口走っていました。

歩いて家を目指すと、湖沿いの道に出ます。

そこで、先ほどの曲芸団が休憩して食事を取っていました。退屈そうに遊んでいた食堂の娘がバイクに跨って遊んでいます。

エンジンがかかりました。そのまま急発進し、幼女を乗せたまま物凄い速度に達します。岩か何かでバイクが跳ね、湖の方角へと弾き出されます。

幼女は手を離し、湖に落ちます。バイクは一直線に飛んでいき、私の乗っていたジャンボジェットに激突しました。

炎上して湖に落ちていくジャンボジェットを、幼女と一緒に呆然と眺めていました。何故か、317人が死んだ事が判りました。

再び一人で歩いていると、強烈な雨に見舞われます。流石は南米、前が見えないほどの凄まじいスコールで、このままでは立ち往生です。

そこへ偶然にベージュ色の軍用トラックが通りかかり、私を乗せてくれました。スコールは既に滝のようになり、地面は川のようにです。トラックが建物にピツタリと横付けし、なんとか建物に入ります。

喫茶店が軽食屋のようなお店で、誰もがテレビのニュースを見ていました。私もニュースを見ると、何と私が映っています。

「さんの鼻の管は、機能していないと言う事が判明しました」嬉しい事に、私の鼻に通されている煩わしいパイプはもう必要ないとのことです。大喜びで引き抜きました。パイプは思ったよりも遥かに長く胃まで達しており、途中で何度も咳き込みます。

何とか全てを抜き去ると、傍にいた看護師さんが飛び掛ってきました。気が付いたら、元の病院でした。

押さえつけられ、再びパイプを鼻の穴に突っ込まれます。そのまま再び胃までパイプを通され、元の状態に戻ってしまいました。

私は半ばヤケクソになり、ツタヤでホラー映画（ゾンビ物）を大量に借りて眺めていました。ゾンビ映画を見ると、体温が下がってきます。

いつの間にか私の身体は氷のように冷えており、ガタガタと震えていました。それでも鼻にパイプを入れられた苦しさを紛らわすために、私はゾンビ映画を見続けました。

飛行機（後書き）

注釈：

この頃、目まぐるしく舞台が移り変わり、とにかく私は「旅をしている」「家に帰りたい」と強く認識していたように思います。

寝ている間、私はずっと高熱を発していたのですが、何度か氷嚢の蓋が開いてしまい、私は意識が無いまま氷水まみれでガタガタ震えていたそうです。恐らくその時に見ていた夢でしょう。

レミングス

凄まじい熱と苦しみにうなされています。

何となく、自分が高熱を発している事を感じ取っていました。

ぐるぐるする視界の中、いつの間にかルールができていました。

横にあるモニタの中で、昔あったレミングスと言うゲームに似たゲームが動いています。そのゲームをクリアすれば熱は収まる、と言うルールでした。

しかし、やってもやってもゲームはクリアできません。

そもそもゲームをやると言っても、黙って見ている事しか出来ません。そう言えば、レミングスもそんな雰囲気ของเกมでした。

そのうち、画面内のレミングス一つ一つが合戦場で戦う武士のように見えてきます。

扇風機がこちらを向くと、強烈に身体が冷やされて武士達がギャーギャー叫んで凍えていました。

扇風機があちらを向くと、高熱が燃え上がり武士達はギャーギャー叫んで燃えてました。

いつの間にか、私は武士になっています。落ち武者です。

その合戦場で生き残った武士を現代技術の粹とかそんな感じで助け出したとか、そんな設定になってました。

こんな思いままでして落ち武者を生かしておく事に意味があるのか。などと真剣に悩みます。

扇風機の風があまりにも辛いために、小さなペンギン型の扇風機を家から持ってきました。

ペンギンは歩いてベッドの下に潜り込みます。先生は「好きにさせておけ」と言っていました。

ペンギン型の扇風機はベッドの下で稼働を続け、私のベッドはキンキンに冷やされて冷たくなってしまいました。

レミングス（後書き）

注釈：

特に高熱を発した事が三度ほどあり、四十三度を越えて命が危ぶまれる事もあったようです。

ところで、私の生殖機能はまだ生きてるんでしょうかね？

確認するのも怖くて調べてませんが。

あ、一応、息子そのものはお元気です。お下劣でどうもすみませんね。

猫

「起きてください。先生、起きてください。」

どうやら私が呼ばれているようです。私が先生なのでしょうか？何だか良く判りませんが、そうだと言っのならそうなのでしょう。ニヤーと猫の声がしました。

「少しはご飯を食べないと、良くなりませんよ？」

眠気はなく、奇妙にすっきりした気分でご飯の事を考えます。最後にご飯を食べたのがいつなのか、何だったのか、全く思い出せません。再びニヤーと声が聞こえます。やたらに猫の声のする病院です。「何なら食べられそうですか？」

うーんうーんと考え、タイヤキと日本茶がいいなあ、と思いました。すぐさま出されますが、どうした事か、まったく食べられません。食べたくて仕方がないのに、手も口も全く動かないのです。

タイヤキに名前を書いてとっておいてもらっ事にし、私はごろりと横になりました。

そこには二匹の巨大な猫が横たわっていました。ふさふさの長い毛を持つ猫で、人間ほどの大きさがあります。

一匹は赤く、もう一匹は青でした。

赤いほうは人間を食い、青いほうは幽霊を食べるのだと判りました。ここは病院なので幽霊はそこらじゅうに漂っています。青い猫はそれを次々に捕まえては食べていました。

はて、赤い猫の方だと思いますと探してみると、病院の横の道で人間を襲っていました。

新宿辺りの高速道路の入り口近くで、手当たり次第に人間を食い散らかし、周囲にはバラバラにされた身体や臓物が飛び散っています。次は私が食べられるのかと思いましたが、どうやら猫は私が飼っているものようでした。

人間を食いまくった責任は自分が取るのだろうか、などと考えてい

たのを最後にこの世界の記憶も途切れます。

猫（後書き）

注釈：

何の暗示でしょうか？まるで伝奇小説の設定か何かのようです。

退院後、「人間を食らう赤い猫」と「幽霊を食らう青い猫」それらを操る「先生」これで小説を一本書こうかと思いましたが、どうしても他の夢の狂気が混ざってしまい意味不明な文章になってしまうために断念しました。

そのうち、もう一度挑戦するかもしれません。

謎の会話は多分、私以外の（意識のある）患者さんに話しかけていた看護師さんの声だと思っています。

インド神話のビデオ

何故かビデオを借りて両親と一緒に見ていました。どうやらインド神話のお話を見るという流れになっています。

いくつかある天井の窓に映像がバラバラに映るのですが、何をどう間違えたものか、インド神話ではなくアニメ（それも大きなお友達向け）が始まってしまい、非常に気まずい空気が流れます。

よせばいいのに、母親がビデオの開発元に電話をかけ、「これはインド神話ではないのか？何？三十台男性向けのアニメ？」などと聞いており、ただでさえ気まずい雰囲気、ますます気まずくなりま

す。
改めてインド神話の世界に入り（？）それっぽい話を見て回りました。

何やら民族間の戦いのお話で、弟を人質に取られた姉が串刺しにされて死ぬイメージが強烈に焼きついていきます。どうやらインド神話（？）では有名な一説らしいです。

何でしょうかこれは？私の書く小説だとたちまちアダルトイックなお話になりそうなシチュエーションですが、この話は色気よりも流血と死にまみれていました。

高速道路を走って病院に帰る途中、道路を照らす街頭の一つ一つに鉤が掛けられており、その全てに戦士の死体がぶら下げられています。

インド神話のビデオ（後書き）

注釈：

実際のインド神話とは無関係です。

夢の中で私が勝手に「これがインド神話か」と納得していただけで、恐らく本物のインド神話は全く別のものです。

て言うか、何で高速道路なんでしょうか。

駅舎病院

いつの間にか、私はバイクで二つの病院を行き来しています。

バイクのハンドルは折れていましたが、何故か運転できました。

一つは砂漠の病院で、裏口が新宿の見慣れた風景になっています。

そこからバイクでどう走ったものか、京王線らしい駅に行きます。

駅舎の中が病院になっており、言われるままに病院を行ったり来たりしていました。

駅舎病院から下を眺めていると、線路ではなく高速道路（多分、中央高速）が見えます。

すぐ近くのICからの加速車線を、バイク便の先輩のバイクが加速して侵入して来るのが見えました。

直後、高速道路を横断していた小学生らしい女の子に衝突し、弾き飛ばしました。

バイク便の先輩が駅舎病院へと駆け込んできて、今の事故の証人になつてくれと頼まれました。

もちろん、高速道路でフラフラと歩き回る女の子の方に非があることは私の目にも明らかだったので、当然とばかりに了承しました。

駅舎病院（後書き）

注釈：

この夢が私の記憶に深刻な問題を残しました。
詳細は後日談にて。

黒人

いつしか病院は海の近く作られた簡素なものになっています。

床は地面がむき出しで、屋台村のようなものをイメージすると近いでしょうか。

そこはガンジャ工場が隣に併設された施設でした。何故かガンジャの材料に大麻ではなく、白いカイガラムシをすりつぶした物を使用しています。

寝なければならぬのにいつまでも寝つけずにいると、女性の看護師さんが「ちつ、まだ起きてやがる」と悪態をつき、慌てて目を閉じて寝たふりをしました。

そのうち、聞きなれたチャリチャリと言う音が聞こえてきます。私の家で飼っている犬の首輪が鳴る音です。

犬は私を見つけると嬉しそうに愛想を振りまきますが、すぐに飽きて余所に行ってしまう。

しかし、近くにいた黒人が「食料だ」とか言って吹き矢を構え、犬を狙います。

慌てて止めさせるのですが、黒人は私の目を盗んでは犬を狙おうとして、油断できません。仕方なく家に電話をして犬を連れ帰るよう頼みました。

それまでの間、私のベッドの上で犬を保護しているのですが、過剰に構われるのを嫌がる犬は逃げ出そうとして、そのうちにバラバラになって逃げ出し、手元には尻尾だけが残りました。

「あとで組み立てればいいか」などと考えながら横になったのですが、いつの間にか私が黒人になっていました。

犬を狙ったのは別のもつと背が低く太った黒人で、何故か妻と子供が居ます。

ここでは眠らない事が最大の悪徳とされているらしく、私がいつまでも眠らないでいるために、妻も子供も苦しい生活をしているよう

でした。

そこには男性と会話をして料金をとる水商売らしき店があり、眠らずにそこに入り浸るのがダメ人間の証なのです。

私も妻と子供を放り出してそこに入り浸っていたら、ガンジャの材料のカイガラムシと牛糞が何かを混ぜたものを下の部屋で焚き、煙攻めにされました。その煙を吸うと強烈な腹痛に襲われるのです。

私は妻と子供に謝りながら、「もう寝るから、ちゃんと寝るから、許してくれー」などと訴えていました。

寝る前に食事をと、食堂（？）に行きます。周囲の看護師さんはマクドナルドの袋を持って自分の部屋へと入っていきます。中身はタンドリーチキンバーガーだと言う事がなんとなく判ります。

一方、私のいる食堂ではメザシのような魚の干物しか置いていません。それしかないのでそれを頼むと看護師さんは元気の良い声で「千円！」と言いました。

千円を払った後、「しまった！両替すればあと十回は食べられたのに！」と意味の判らない後悔をします。

後悔しながらメザシを齧ると、再び強烈な腹痛に襲われました。どうやら、食中毒のようです。激しく嘔吐してしまい、私の身体は毒を抜くために横向きにぶら下げられます。

そのまま前進の穴と言う穴からゴムホースを突っ込まれ、水を流し込まれました。風船のようにパンパンになるまで水を詰め込まれ、一気に抜かれます。

その水と一緒に毒が流れ去っていくのが判りました。

黒人（後書き）

注釈：

犬のエピソードも私の記憶に問題を残します。

カイガラムシだの妻だの子だのは本当に訳が判りません。夢の中の狂気としか言いようがありません。

ドラゴンボール

ガンジャ工場の続きの世界です。

ガンジャ工場（兼病院）は、浜辺に作られたテーマパークだったようです。

そこを抜け出すと、南米にしてはやたらに近代的な町並みに出ました。そこはネットゲームの世界だと理解できます。（もちろん根拠無し）

ネットゲームの世界では、何人かが対戦していますが、そんな中でドラゴンボールのゴクウとフリーザが戦っていました。

二人とも雲をつくほどの巨大な姿で、何故かフリーザは剣をぶんぶん振り回してます。

巨大な剣が通行人に当たると通行人は真つ二つになってしまい、「これはネットゲームじゃない」と気付いて死んでしまいます。

それを、他の脇役（ヤムチャとかそのへん？）が押さえつけて「これはネットゲームだ」と言い聞かせて助けてました。

また、私は私で「ドラゴンボールの登場人物の強さがインフレを起こしてるのは、単にデカイからなんだ」と、相変わらず訳の判らない納得をしていました。

いつの間にか病院のベッドに戻っており、今まで見ていたドラゴンボールの光景は、病院の先生たちがプレイしているゲームの内容だと言う事が判ります。

どうやら、病院の患者の身体に何かを埋め込んでゲームに繋ぐ事で、ゲームの内容を操作できるようです。

私の身体にも黒い丸薬のような訳の判らないものが埋め込まれ、ゲームの改造につき合わされました。

黒い丸薬を埋め込まれる処置は非常に苦しく、寒く、特にその処置が終わったときには冷たい床に叩きつけられるような強烈な痛みを感じます。

処置が終わったところで父親が待つており、「頑張れよ、必ず良くなるからな」と励ましていました。

私は「いや、この処置意味ねーから。ただのゲーム改造だから。とーちゃんゴメン」とか返事をしてました。

何て酷い病院なんだ、覚えてろ、必ず訴訟を起こしてやる。とか考えていました。

そんなゲーム改造が続くうちに、鳥山明がデザインした魔女みたいなのが病院をうろつき始めます。それに見つかると殺されます。

私は必死に寝たふりをしていました。

ドラゴンボール（後書き）

注釈：

見た夢の中で妙に生々しく、荒唐無稽な内容です。

ドラゴンボールは随分前、フリーザ編が終わった辺りで読むのをやめたので、登場人物はその辺までです。

どうやら大きな手術が行われるときには父親か母親のどちらから付き添う規則のようで、この日はそう言った手術があったようです。

とは言え、意識が無い間に十六回もの手術をしたそうなので、どの手術の記憶なのかは知る由もありません。

痙攣

再び、ジャンボジェットの中の病院にいました。トイレに行きたくなり看護師さんに頼みますが、許してもらえせん。

看護師さんの目を盗んで、こっそりとトイレで用（大きいほう）を足すと、いつかの鉾がボロボロと出てきました。ああ、これでチュルチュルの神様には会わなくて済むんだ、と安心しました。

ベッドで目を覚ますと、そこは真っ赤なランプに照らされた部屋になっています。

枕元にはクリスマスツリーが置いてあり、ピカピカとイルミネーションが光っていました。そこで再びトイレに行きたくなります。

しかし、今度はトイレには行かせて貰えず、破裂しそうなほどの尿意に苦しみます。

膀胱が破裂しそうになり、じたばたと暴れますが、突然暴れる右手が勝手に動き始めました。

体中が、特に右手が激しく痙攣し、信じられないほどの激痛に襲われます。

右手は折れて全く動かないのに、身体が全力で痙攣を繰り返し、右手を力任せに動かそうとします。

ベッドの上でのた打ち回り、看護師さんが何かの注射をすると、私の身体はアメリカ人のフットボール選手になり、少しだけ楽になりました。

見ると、右手だけはフットボール選手ではなく見た事もない細い少年のもので、折れた腕を少年から貰って移植したのだと判りました。その少年の右腕に「すまねえ、すまねえ」と謝っていましたが、そのうちに再び痙攣が始まりました。

再び激痛にのた打ち回り、そのまま激痛の中で意識が途絶えました。

痙攣（後書き）

注釈：

この痙攣は現実起きていたもので、薬の副作用だそうです。

麻酔だけでも数種類、その他にも筋弛緩剤など、色々な薬物を投与されていたそうです。

この頃には既に峠を越えていたらしく、薬の量を減らしたところ禁断症状のような状態に陥り、全身がメチャクチャに痙攣していたそうです。

尿意に関しては、意識が無い間は尿道にカテーテルと言う管を差し込まれて勝手に尿が吸い出される仕組みなのですが、この管の角度が不味いと逆流して膀胱破裂の苦しみを味わいます。

この苦しみがキツカケとなり、痙攣が始まってしまったようです。

また、この時期から混濁したまま意識が戻る事があり、父親の呼びかけに反応を見せる事もあったようです。

高速道路

「痙攣の原因が脳にあるかもしれないので、ＣＴスキャンを取りま
すね」

そう説明されたのをはつきり覚えています。相変わらずの混濁した
意識ですが、断面的には記憶が残っているようです。

南米とは思えないとても綺麗な機械に入られます。

いつの間にか、身体はすっかり落ち着いているようでした。

窓の外を見ると、そこは地下を走る高速道路のＹ字の合流地点の真
ん中に作られたパーキングエリア内の病院だと判ります。

オープンテラスの喫茶店などを備えた小綺麗な所です。

突然、地下であるにも関わらず、空から黒人がパラシュートで降り
てきました。

どうやら例のバイクが激突したジャンボジェットから脱出してきた
人らしく、ニュースを見るとそこかしこにパラシュートに乗った黒
人が着陸しているようでした。

その黒人はガンジャでラリッているようで、陽気ながらも善悪の判
断ができなくなっています。見ると、他にも陽気な黒人は大勢いて、
ガンジャでラリッたまま他人の家に上がりこんで食い物を食い散ら
かしたり、散々に暴れています。

こりや大変な事になったぞと思っていたら、看護師さんの一人が襲
われていました。

はつきり書くのも憚れるのですが、どうやら されたようで、血を
流しながらも怒り狂っています。

怒りに任せて外の砂漠に飛び出して、湖の浜辺で巨大な蟹を捕まえ
て、黒人の を挟んで切り取っていました。

黒人は泣きながら「俺の が汚いから、神様にちょん切られち
まった」とか喚いています。そう言えば、蟹は神様の使いなんだっ
けな、などと思いつながらその様子を見ていました。

高速道路（後書き）

注釈：

黒人、南米、砂漠、湖。

看護師、CTスキャン。もう現実と夢が渾然一体となって変態的かつ力オスな状況になっています。

打ち切り漫画

いつの間にかベッドに戻されますが、非常に心地良いベッドに変わっており、ぐっすりと眠れました。

快適になるほどに動けないもどかしさなども募っていき、体中にくっ付いている管やらコードやらが煩わしくて仕方がありません。

どうにか剥がそうとしますが、看護師さんに取り押さえられて、指を使えないように拘束手袋をさせられてしまいました。

その手袋の中に、この間トイレで出した鉗が入っており、何とかそれを手袋の外に出そうと悪戦苦闘しますが、どうやっても出せません。

そのうち、ここが漫画の世界だと言う事が理解できてきます。

格闘漫画か何かで、私は重傷を負った登場人物のようです。しかし、その漫画は確か打ち切りになったはずでした。（何の漫画かは判らないが）

大人しくしていると、手袋を外してもらえたので、すかさず指に取り付けられていたコードを剥がしました。

再び看護師さんに取り押さえられますが、もうこの漫画は打ち切りになっているはずです。打ち切りになっている以上、これ以上の治療は必要ないはずです。

それを一生懸命に看護師さんに伝えます。

何故か声が出ません。スラスカと喉が音を立てるばかりで、喋れません。それでも、必死に喉を動かして「この漫画は、打ち切り」と繰り返しました。

看護師さんは、そこまで言うならと指のコードを戻す事だけは勘弁してくれました。

天井を見上げると、シミの一つ一つがアスキーアートになってる事に気がきます。

同時に、今まで見ていた全ての漫画が、実はアスキーアートで描か

れていた事に気が付きます。何でこんな事になったんだろう。と、訳もわからずに悩んでいました。

いつの間にか、他にもいくつかの漫画の打ち切りが決まっており、他の漫画の登場人物の怪我也、この際だから私の身体と一緒に治療しちまえー、みたいな流れになっており、関係ない健康な脚とかにも包帯を巻かれます。

私はさすがに怒り狂い、ふざけんなーとばかりに足の包帯を解きました。脚には隕石が埋め込まれており、それがコロんと転がり出てきました。

どうやら、打ち切りになった漫画の主人公が、隕石が身体に埋まっていたようです。そんなものに付き合ってもらえないとばかりに、私は隕石をどこか遠くに捨ててしまいました。

また、これは何の漫画か判別できませんが、昔ヤングジャンプで連載していた押忍！空手部と言う漫画のバイクレース編に私の愛車で参加していました。

峠を攻めていると何故かダイヤモンドに巻き込まれて凍りつきました。駐車場では車の中でカーックスをしているので、嫌がらせにその車をトイレ代わりにします。

車の中で用（大きいほう）を足したら、看護婦さんにメチャクチャ怒られました。

おぼろげながら、ハンター×ハンターと言う漫画の登場人物にもなっていたような気がします。このころ、この漫画の登場人物が大怪我を追って病院で目を覚ますシーンがあったのですが、その辺が被っていたように思います。

打ち切り漫画（後書き）

注釈：

もうメチャクチャです。

思い出す本人にも何が何だかさっぱり判らないので、記憶のまま文章にしました。

段々意識が夢から現実よりになってきたために、私の記憶にあった漫画やゲームなどの情報が一気に噴き出していたのではないでしょうか？

ちなみに私には二次創作の趣味は全くありません。

近所の道

自動車でどこかを走っています。やたらに暗いので夜だと思っています。外を見ると、京王線沿いの見知った道でした。

車には両親と姉が同乗しています。

母親が何か言いたい事があるのかと言うので、そう言えばゾンビ映画をツタヤに返さなければと思います。

左手でペンを持ち、なんとか書きます。「TSUTAYA」と書いたのですが、結局解読は不可能だったようです。

姉はこんな私のために文字盤を用意していました。

私が呼びかけに対しある程度の反応を示すので、意思疎通が図れるかと思い、文字盤でひらがなを順に指し示す事で会話を試みていたのです。

何を言えば良いのか判らないでいると、父親が何か冗談を言いました。私は冗談を言い返さないといけないと思い、一生懸命に文字盤を指差します。

「そのころ、ソビエトはえんぴつをつかった」

と伝えようとしたが、途中で「俺はなにを言ってるんだ」と気が付いてしまい、止めました。

しかし姉は「練習だから」と言っただけで刺し続けるように言います。どうせ意味のない事だから「いらん」と言うジェスチャーを繰り返してました。

気が付いたら家に付いています。勝手に家に帰ったら看護師さんに怒られる。そう思い、病院に戻ろうかと思いましたが、良く見たらここは家ですが、同時に病院なのでほっとしました。

飼い犬が喜んでベッドに乗ってきます。が、飼い犬は原種コーギーのはずなのに、ミニチュアダックスフントになってました。

それでもいいやと、ダックスを抱いて寝ました。

近所の道（後書き）

注釈：

実のところ、私は事故直後から喉に呼吸器を通して、全く喋る事はできませんでした。

傍から見たら私ははつきりと意識があるように見えていたようで、姉は文字盤を作って意思疎通を図りましたが、実際の私は夢と現実の境界線をフラフラしていました。

死

再び手術を受けました。

迂闊にも例の麻薬を吸わされてしまい、私は死んだ事になってしまします。

私は高速道路でバラバラになっていました。脳が道路の真ん中にコロリと転がっており、それにくっ付いた目玉で車が流れる様子を見ながら、「ああ、ついに死んだんだな」と思っていました。

目を覚ますと、カーテンの向こうで手術をしている様子を感ずます。カーテンの向こうでは私が手術を受けているようです。

看護師さんや先生の声が聞こえてきます。

「駄目だったね」「うん。もう駄目だね」

ああ、やっぱり死んだんだな。などと思いながら、この意識も途絶えます。

死（後書き）

注釈：

この他にも死ぬ夢は沢山見ていたような気がします。

目が覚めた日

麻酔が切れて、手術が終わった事が判りました。
耳元に声が聞こえます。

「さん、聞こえますか？」

「……はい」

自分が喋れる事にしばらく気が付きませんでした。

「さん、自分の名前を言ってください」

「……です……」

「生年月日と年齢は言えますか？」

「昭和 年 月 日、 歳です……」

何故か実際の年齢よりも五歳上の年齢を喋ってしまいましたが、大した問題とは思われなかったようです。

ここに至り、ようやく自分が喋れる事に気がきました。

「さん、貴方は交通事故で肝臓を損傷し、この病院に運び込まれました」

「……はい」

話を聞く毎にどんどん現実感が蘇ってきます。

「辛うじて一命を取り留めましたが、戦いはまだまだこれからです。
一緒に頑張っていきましょう」

「はい、ありがとうございます」

呆然としつつも、意識が次々に現実感を取り戻し、自分が信じられないほど長い間、夢の世界を彷徨っていた事に気が付きます。

ようやく、ようやく現実に戻ってこれたと言う実感がありました。

後日談：困った問題1

母親と話すうちに、状況がどんどん掴めてくるのですが、私は突然重要な事を思い出します。

まず最初に思い出したのが、裁判の事。

バイク便の先輩が人身事故を起こして、私が証人として参加しなければならぬのです。あの裁判はどうなったのでしょうか？私が証言をすっぱかしてしまった為に、先輩は交通刑務所に入ってしまったのでしょうか？

慌てて、母親に裁判はどうなったかを聞きますが、もちろんそんな裁判はないと言われます。

考えてみれば、入院してベッドの上で寝てる間に先輩の事故を目撃できるはずがありません。

そう考えて、初めてその出来事が夢である事に気付きました。

恐ろしい事なのですが、逆に言うと、そうして、現実との整合性を突き合せないと、自分の記憶が夢なのか現実なのかわからなくなっていたのです。

次に悩んだのはゾンビ映画でした。

ゾンビ映画を見たのは確かに夢の中なのですが、しかし私の手にはゾンビ映画をツタヤで借りたと言う生々しい記憶がはっきりと残っているのです。

きつと、事故の直前にツタヤで借りていたに違いないと思い、母親に私の部屋を探してツタヤに返却してもらうように頼みました。

しかし、私の部屋の何処にもレンタルビデオの袋は無かったそうです。

ツタヤに問い合わせても、私が借りた記録は残ってないそうです。この症状には、最近は随分減ったとは言え、かなり苦しめられます。

後日談：困った問題2

死ぬ事が怖くなくなった事。

これは良く聞く話ですが、例に漏れず、私もあの体験を通して「死」と言うものに恐怖を全く感じなくなっていました。

かつこいいもんじゃありません。むしろ、かなりヤバイ状況です。

何しろ、「あの場所にもう一度行きたい、あの幸福感をもう一度味わいたい」この欲求が心の奥底にはつきりと焼きついてしまっているからです。

「うあああああ面倒くせええええええ」と思うような事があるとふらりと飛び降りようとする自分が顔を出します。少なくとも二回経験しました。

一つは加害者側との和解に至る場面。もう一つは歯医者にかかり、治療に相当な時間がかかる事が判明した時。

「もう面倒くさいから死んじゃおう」とかナチュラルに考えて何の疑問も無く飛び降りようとする自分が居たりします。

しかし同時に、「まだ死にたくない」と思う自分も居て、強い葛藤を感じると危険な闘ぎ合いが始まります。

あんまりにも危ないので、とにかく趣味を持ち、いろいろなモノを造り出す作業に没頭するようにしています。

常に「造りかけ」のものを沢山用意しておいて、「完成させるまでは死ねない」状態に自分を置いておきます。小説もその一環です。

どうにかそう言った「モノ造り」で食っていけないかと、今も模索の毎日です。

後日談：困った問題2（後書き）

とりあえず、私の見た夢に関する話はこれでおしまいです。

散発的に思い出す事があるので、なにか強烈な事を思い出したら追加していこうと思います。

一応、私の身体についても書いておきます。

主なものは肝臓破裂、および肩関節の粉碎、大腿部に裂傷でした。肝臓破裂が直接的に生命に危機を及ぼしており、特に肝臓に走っているメイン血管3本が全て切れて出血が止まらなかったようです。出血が止まるまでに四日間を要し、この間に開きっぱなしだった私の腹部は内臓が腫れ上がってしまい、閉じる事ができなくなっていました。

仕方ないので剥き出しの内臓の上に皮膚を移植して塞ぎますが腹筋が横に押しのけられて全く機能しなくなっていたため、お腹が妊婦のようにぼつてりと膨らんでしまいました。

一年ほど経過して傷口が収まってきた頃に手術でちゃんと塞ぎ、更にその一年後にメッシュと言う素材を埋め込む事で、ようやく人並みに見える体形を取り戻しました。

今ではコルセットを付ける事で最大二時間半程度の直立歩行が可能なまでに回復しています。

右肩の間接部分が粉々になっていましたが、直接命に関わる肝臓の方を優先されていたためにこちらは後回しにされ、ある程度の障害が残りました。

現在は一応動かす事は一通りできるものの、稼動角度は通常の半分程度、腱が機能していないため力に関しては赤ん坊並です。辛うじて日常生活は出来ると言う程度です。

とりあえず何とか命をとりとめ、幸運にも制限付きとは言え自由に

動き回れる程度の身体機能も残りました。
あとは、ひたすらにリハビリの毎日です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386m/>

正気と狂気の狭間

2010年10月9日22時53分発行